

鐘 の 音 に 聞 く 環 境 The Soundscape of Ringing Bells

大 野 嘉 章 *
Yoshiaki OHNO *

ABSTRACT: The residents who receive the sound of an urban environment also create the sound environment in which they live everyday of their lives. It is important to recognize how the residents feel about their immediate sound environment because then we can begin to understand what type of future environment the residents will prefer.

This report shows one investigation of how junior high school students and their families react to the daily sound of temple bells in Nerima City. This investigation is an attempt to understand how individuals apply meaning to the sound environment (i.e. "Soundscape").

The images created, or conjured, by the sound of a ringing bell are formed by the listener's previous experiences as well as the cultural influence of the society in which he/she lives or has lived. These mental images created from bell sounds, however, are evaluated in reference to the previous experiences and cultural influences mentioned earlier.

In order to create a rich interpretation of one's environment, rich images are essential.

KEYWORDS: SOUNDSCAPE, BELL SOUND, LIFE HISTORY
ENVIRONMENTAL IMAGE, SEMANTIC ENVIRONMENTAL VIEW

1. はじめに

都市の音環境の受け手である都市の生活者は、同時にまたその音環境の作り手でもある。都市の音環境の主体である市民がどのように身近な音環境を受け止めているかを把握することは、彼らがどのような環境を作り得るかを探ることともつながる。

本報では、練馬区内の寺院の鐘の音がどのように聞かれているか、中学生とその家族を対象に行なった調査を事例として紹介する。この調査は、聞く主体によって意味づけられた音の環境(soundscape)調査として企画された。

2. 調査の目的

(1)この調査は、鐘の音に耳を傾けることを通じて、身近な音環境への関心を促すという意識啓発を目的とする。環境教育的意味で、調査が対象者の現在の認識を明らかにするだけでなく、調査に参加したことによって音環境に関心を持ち、考える契機を与える調査設計をする。

(2)鐘の音を糸口にして思い起こされる諸々(個人の思い出、体験、知識、あるいは気づき、期待、イメージ)を把握し、人々の生活や成長の中で鐘の音がどのような意味を持つかを考察する。

(3)音の聞こえ易さが音圧レベルに比例するならば、音源を中心として同心円的に聞き取られる度合が低下し広がっていくことが示される筈である(図-1:参考文献¹⁾の図版より筆者が作成)。しかし、現実にはいろいろな要因(地形や高層建築物による遮蔽、暗騒音による妨害、地域環境に対する無関心など)によってその形状は乱されるであろう。ある寺院の鐘が聞こえる範囲をコンターとして描きこれを考察する。

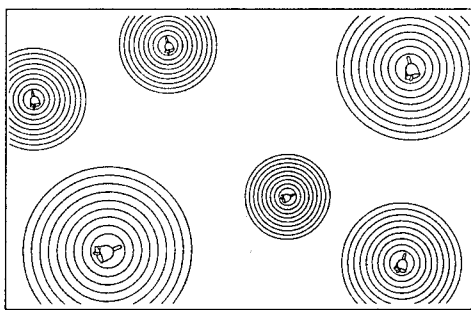


図-1 想定される鐘の音コンター図

3. 調査の概要と結果

寺院で撞かれる鐘は、時、場所、音量音質などが安定していて変動しない。街の形態や市民の生活様式が変化し、その結果として音環境の変化があっても、変わらぬ鐘の音の存

* 練馬区 環境保全課 Nerima City, Environmental Conservation Section

在により、環境の変化を知ることができる。鐘の音は変わらずに鳴り続けるが故に、地域の「音の標準」と言うことができる。また、その鐘が響き渡る範囲でしか聞くことのできない地域の「固有の音」でもある。これらの点から調査対象の音として「鐘の音」を選んだ。

中学生とその家族を調査対象にしたのは、学校の協力を得て、回収率を高められること、練馬区内全域を漏れなくカバーできること、世代間の差が考察できることなどを考慮した結果である。

調査の概要と結果を(表-1)に示した。見込みどおり、学校の協力により、高い回収率が得られた。調査結果は「ねりま・鐘の音マップ」としてまとめ、解説を付して、調査対象者全員に還元した。同マップは環境情報地図システム²⁾を用いて、(1)回答者全員の所在地、(2)毎日の鐘編、(3)除夜の鐘編、(4)寺院名の認識編の4枚が作成された。ここでは(3)除夜の鐘編を例示した(図-2)。

なお、練馬区内には梵鐘が14カ寺、西洋鐘が3教会にある。毎日鐘を撞くのは7カ寺、3教会であり、除夜の鐘は14カ寺全てで撞かれている。

4. 考察

4. 1 幹線道路近傍の負反応 鉄道沿線との比較

環状7号線近傍で「聞こえない」との回答比率が高く、自動車走行音の影響と認められる。回答肢1「いつもよく聞こえる」から回答肢3「聞こえるような気がする」までの回答を「正反応(1-3)」、「聞こえない」の回答を「負反応」と表示(以下、本稿において同じ)すれば、沿道200mの範囲で正反応(1-3)12件、負反応38件であった(図-3)。谷原交差点など幹線道路近傍で同様の傾向を認めることができる。これに対して、鉄道沿線ではこのような現象は認められない(沿線200mの範囲で、正反応(1-3)50件、負反応21件、図-4)。

自動車走行音は途切れることのない連続音であるのに対して、列車走行音は自動車走行音より音圧レベルが高い時があっても時間的には離散的な音であり、列車が通っていない時には地域本来の音環境の出現を妨げない。鐘の音の伝搬に際しては、鉄道よりも幹線道路の方が障害となることが解る。

多様な音の存在がマスキングされてしまうような音環境の変化をM. シェーファーは音環境のLow-Fi化と呼んだ³⁾。この視点で言えば、自動車は鉄道より音環境をLow-Fi化させる交通機関と云うことができる。

4. 2 鐘の音コンター把握の困難

鐘を有する各寺院毎に、正反応(1, 2, 3)に対応する包絡線をひくことは困難であった(図-2)。特定の鐘についての可聴範囲の境界を決定するのもむずかしい。調査目的の(3)を積極的な形で得ることはできなかった。

4. 3 寺院の近傍での負反応

いずれの寺院についても、その直近にまで負反応が存在する(図-3)。聴取は物理的な音圧レベルだけで決めるのではないことを示している。聞き手を取り巻く種々の状況(窓のサッシ化、AV機器の増加、地域への関心低下など)を理由として考えることができる。

4. 4 鐘の音の認識域

寺院名を上げた回答は627件で、毎日あるいは除夜の鐘の音が聞こえたと答えた正反応

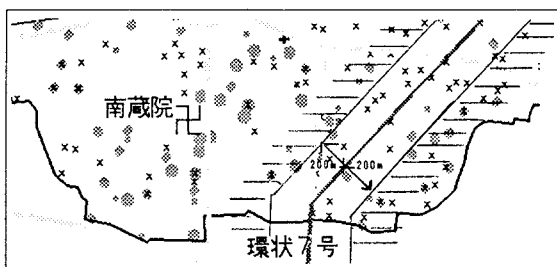


図-3 幹線道路の影響と寺院直近の負反応

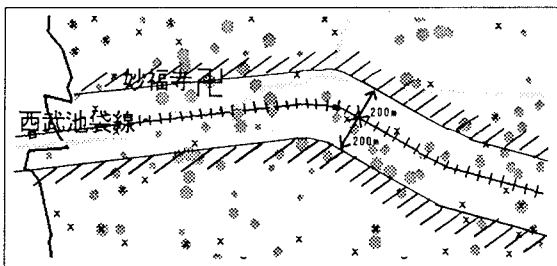


図-4 鉄道の影響

表 1 調査及び集計結果の概要

調査対象 練馬区内全区立中学校（34校）

中学1年生 4808人

調査期間 93/12～94/1

調査方法

学校を通じてアンケート用紙を配布し、生徒は自宅で

観察のうえ記入し、学校を通じて回収した。

調査項目

- (1) 毎日の鐘が聞こえるか
- (2) それは何時に聞こえるか
- (3) 除夜の鐘が聞こえるか
- (4) どここの寺院の鐘が聞こえたか
- (5) 鐘の音について思うこと

回収数 3807 (79.2%)

有効回答数 3689 (76.7%)

問1.「鐘の音が聞こえますか」あなたは、朝や夕方に家にいて、お寺や教会の「鐘の音」を聞いたことがありますか。以下から選んでお答えください。

回答数(計3642)

- | | |
|---------------------------|------|
| 1□いつもよく聞こえる | 153 |
| 2□時々、聞こえることがある | 387 |
| 3□はっきり覚えていないが、聞こえるような気がする | 208 |
| 4□全然聞こえない | 2305 |
| 5□わからない | 545 |
| 6□その他() | 44 |

全体の過半数(63%)が「全然聞こえない」と答えている。「聞こえるような気がする」までの割合は21%であった。平日鐘の音を聞くことのできない地域はかなり広がっている。

問2.省略

問3.「除夜の鐘は聞こえましたか」大みそか(12月31日)に家にいらっしゃる方は、お寺の「除夜の鐘」を注意して聞いてみてください。あなたの家では、どのように聞こえましたか。以下から一つ選んでお答え下さい。

回答数(計3581)

- | | |
|-----------------------------|------|
| 1□とてもよく聞こえた | 235 |
| 2□遠くから聞こえてきた | 506 |
| 3□はっきりとは聞こえないが、鳴っているような気がした | 319 |
| 4□全然聞こえなかった | 1452 |
| 5□注意して聞くのを忘れた | 349 |
| 6□大みそかには家にいなかったものでわからない | 596 |
| 7□その他() | 124 |

「全然聞こえなかった」とする回答は40%近くに減少し、反面「鳴っているような気がした」までの回答は30%近くにのぼる。地域的な分布を「ねりま・鐘の音マップ 除夜の鐘編」に示した。除夜の鐘をつく14か所の寺院を併せて地図上に示している。

除夜の鐘については、聞くことのできない地域の方が少ない。

問4.「お寺・教会の名前」(鐘の音が聞こえる人のみ、答えてください) あなたの家で聞こえる「鐘の音」は、どこのお寺や教会のものかわかりますか。

回答数(計627)

問5.「鐘の音について思うこと」あなたや家族の方で鐘の音に関して何か日頃から思っていること、気付いたこと、昔の思い出などありましたらお答え下さい。(あなたの家で聞こえる鐘でなくとも結構です。)

1447人(39%)の感想、思い出を寄せられた。家族から585の回答があった。(母:401人、父:108人、祖母:4人、祖父:2人、その他:70人)

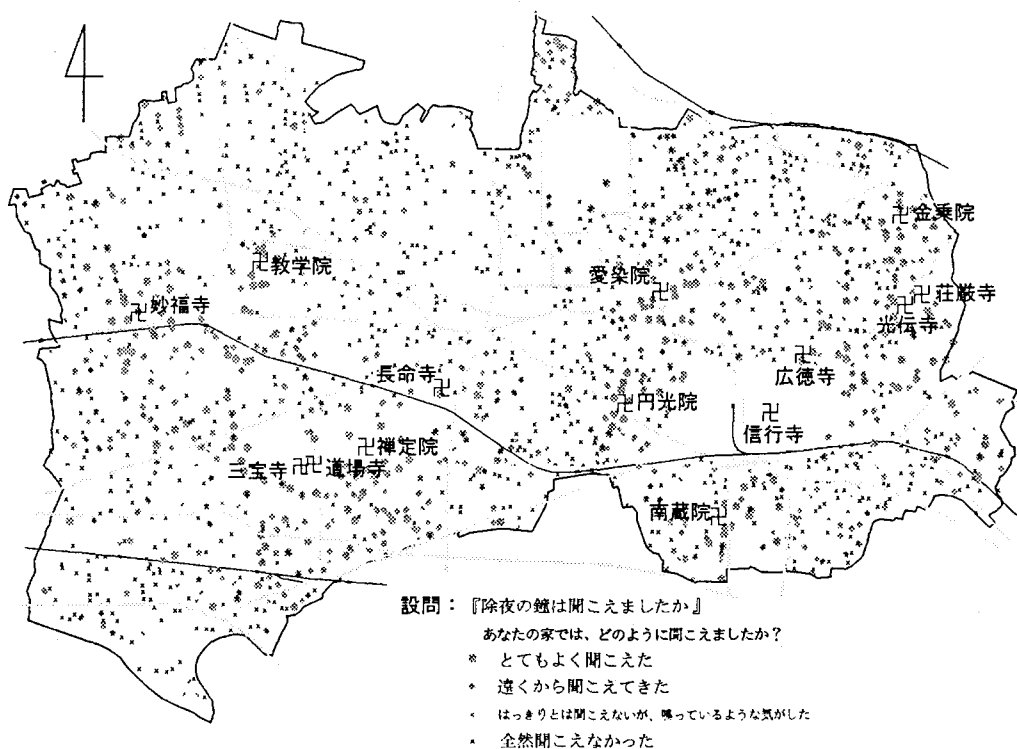


図-2 「ねりま・鐘の音マップ」(除夜の鐘編)

(1-2)の回答1022件の61%であった。この寺院名の認識の回答から、各寺院毎にその包絡線を引き、認識域を得ることができる(図-5)。この認識域の広い寺院は、地域に檀家が多い、幼稚園を併設している、開放的な境内である、寺院名が地名に残されているなど地域と強い関係を持つ点が共通している。禅宗の道場のように修業の場である寺院の鐘の認識域は狭いようである。。キリスト教会の鐘の音の認識域は仏教寺院のそれに比べ狭く観察された。認識域の伸縮は、鐘の音の音響パワーの大小というより、対象寺院への地域の親近度合を反映していると考えられる。

ある寺院の鐘の音が聞こえることで特徴づけられた環境を鐘の音共有圏と云うことができるだろう。この鐘の音共有圏の存在に気づき、このような環境に帰属していることの意識化は身近な地域の音環境へ更に関心を高めるものと期待できる。

その一方で、包絡線に囲まれた認識域から外れる特異点が存在する。明らかに勘違いの認識である。自分が聞いた鐘の音色の特徴を判別して、音源の寺院を認定することは一般の市民には困難であるから、音源の特定は推定あるいは聞き伝えによる回答とならざるを得ない。練馬に生まれ育って50年になるある住民と30年余毎日鐘を撞き続けてきたある住職がいずれも毎日聞いていた鐘の所属について思い違いをしていたことを今回の調査の過程で知った。思い違いが長年是正されるとこなく経過できたということは、鐘を撞く特定の寺院からの特定の情報を聞き手が読み取る様に要請されているのではないことを示している。

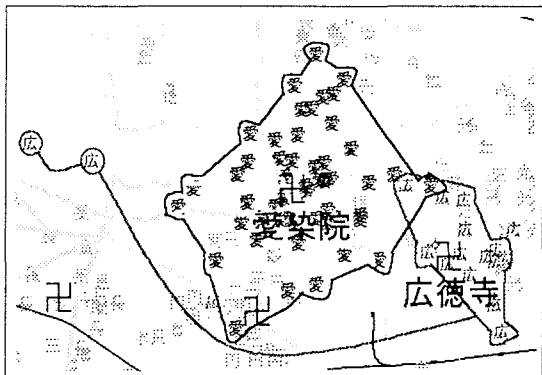


図-5 寺院名の認識域

4. 5 影としての毎日の鐘

除夜の鐘は撞くが毎日の鐘は撞かない寺院に注目する。毎日の鐘マップでこれらの寺院の周辺を見ると、本来聞こえる筈はないのに、少なからぬ(1ヶ寺あたり10件以上)正反応が認められる(図-6の妙福寺の例では、同寺院の鐘の音認識域内において毎日の鐘の正反応(1-3)37件、除夜の鐘の正反応(1-3)110件)。これらの分布の形態から、他の寺院からの影響とは考えにくい。除夜の鐘マップの正反応の一部が「擬似的な」反応として現れているように読み取れる(図-6)。

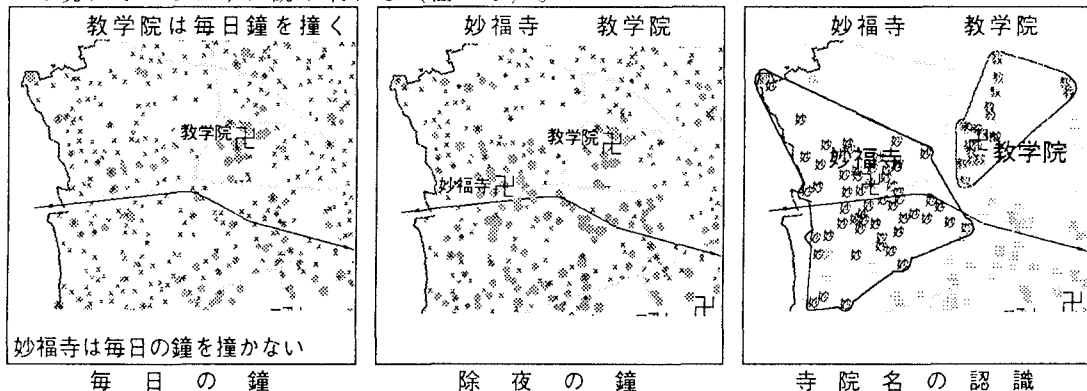


図-6 影としての毎日の鐘

この点について次のように考える。回答者は対象となる寺院に鐘楼があり、梵鐘が吊されていることを見て知っている。その一方で、日本人はお寺の鐘は朝夕に鳴らされているものだということを、童謡、童話、歌舞伎、俳句、小説などから繰返しインプットされ、その視覚的イメージと聴覚的イメージとが不可分に織り込まれている。その結果、視覚的認識が聴覚的イメージを随伴させることとなり、聞こえる筈のない「毎日の鐘」を聞こえ

ていると回答させた。この擬似的な正回答の発生する範囲が寺院名の認識域と符合すること、この推論を補強する。

かつて鳥越・田中らは、神田ニコライ堂の鐘の音を調査した折、同様の発見をしている。調査時点で既に、ニコライ堂の鐘は毎日鳴らされなくなって10年以上経過していたが、ニコライ堂周辺に長年住んでいるいわゆる「神田っ子」へのインタビューで「毎日鳴っているよ」という回答に少なからず出会ったと報告している⁴⁾。

音事象について、経験や知識によって作られた「環境イメージ」が現実には優先して認識を形作ることがあると理解できる。この現象を最初の発見にちなんで「ニコライ堂効果」(Nikolai Cathedral Effect)と名付けることを提案したい。

4. 6 鐘の音についての考えや思い出

ここでは調査目的(1),(2)を考察するため、設問「鐘の音について思うこと」「あなたや家族の方で鐘の音に関して何か日頃から思っていること、気づいたこと、昔の思い出などありましたらお答えください」の回答群(表-2)を分析する。数量的な視点よりも、語られた内容に注目する。

4. 7 「最近聞こえなくなった」(表-2-1)

昔はよく聞こえていたのに、最近は聞こえなくなった、と指摘する意見が相当数あった(147件中12件)。長年住んでいる親の世代には、鐘の音に注目することでの音環境の変化に気づく契機を与えた。

しかし、中学生までがこのような回答をしているが、現在の中学生の記憶にある期間内でそれほど急激な音環境の変化があったとは考えにくい。実際に昔聞こえていて最近聞こえなくなったというよりは、かつては朝夕撞かれていて広く響きわたっていたという文化知識のインプットから、聞こえていた「筈」と認識され、自分もかつては聞いていた「筈」となり、結果的に「知識」が「経験」の中に刷り込まれたと推察する。イメージが経験を書き換えた可能性がある。

4. 8 鐘の音の宗教性(表-2-2)

親の中から宗教を理由とする拒絶反応が2件あった。他方、宗教上の理由から好感を示す反応も少なく、やはり2件であった。鐘の音は宗教施設から発せられる音であるにもかかわらず、受け止める市民はほとんど宗教的メッセージとして聞いていないと考える。

4. 9 鐘の音の中の日本(表-2-3)

文章中に「日本」を含む感想が16件あった。梵鐘は日本だけのものではなく、朝鮮鐘、中国鐘があることは知られている⁵⁾。東洋の仏教文化に共通するものであるにもかかわらず「日本的」とイメージされている。「仏教」からは東洋がイメージされるのに、「鐘の音」は東洋より日本をイメージさせている。鐘の音が宗教の枠組みを越えて、日本の文化の中に固有の位置を占めてきたことの表れであろう。

4. 10 鐘の音のイメージ(表-2-4, 5, 6)

鐘の音は、多くの場合たいへん好意的に語られている。「心がなごむ」「すがすがし気持ち」などの表現が頻繁(48件)に使われる。鐘の音に対する好感は、鐘の音に内在する音響的要因によると云うよりは、評価する側に好意的イメージが先にあって、イメージの適用として聞かれていると考えられる。そのイメージは、文化によって形づくられ、その中で生きた個人の体験によって補強されていると考えられる。

更に、除夜の鐘を聞けない人達に対しても除夜の擬似体験をさせるという点で、テレビ番組「ゆく年くる年」は文化伝承に小さくない役割を果たしていると思われる。この番組のことに触れた意見が15件あった。

鐘の音について、うるさい、やかましい、と答える中学生もいる(11件)が、単に言い放つのみで、不快さの説明を補うものはなく、根の深い反感を示しているようには感じられない。

4. 11 思い出の中の鐘の音(表-2-7)

鐘の音が引金になって、思い起こされる思い出がある。特に親の世代に熱い思いを語る例が多い。この設問は本来生徒が家族などから聞き取り記入することを想定していたが、親の思い出は回答用紙に親自身の手で書き込まれた例が大半であった(家族による記述

表 2 鐘の音についての思い出（抜粋）

1. 最近聞こえない

- 昔は良く聞こえていたが最近交通や生活の音に隠れあまり聞こえない。//父
- 小さいときはよく聞こえて居たけれど最近ほとんど聞こえない。

2. 鐘の音の宗教性

- 寺（教会も）の鐘などは宗教的な意味もあり興味ありません。寺や教会の鐘の音が音環境とは思いません。//家族
- 宗教が違うので鐘の音はわからない。//母
- 夕方聞こえてくる鐘の音は、今日一日無事に過ごせたことを私に感謝する意味と先祖を敬い顧みるための音の様な気がします。//母
- 近くの寺の鐘の音が時々聞こえる。仏教の信心の心を思う。//母親

3. 鐘の音の中の日本

- 鐘の音を聞くと日本だな、とつくづく思う。
- 日本の音という感じ、大変風流なもの感じます。
- 鐘の音は日本の文化の現れだと思う。絶対に絶やしてはいけない。//兄
- 日本人の心を子供達に残してゆく一つの方法だと思います。//母
- 聞いたことはいないけど、日本的なイメージがあると思う。

4. 鐘の音のイメージ

- 除夜の鐘を聞くと心が和む。
- 「鐘の音」……いいですね。毎日聞こえてきたらいいですね。やすらぎを感じます。//母
- 鐘の音を聞くと心が洗われ、清々しい気持ちにさせられます。//母
- 鐘の音は時として人の心を奮い立たせ、また安らぎを与えてくれます。//父
- 早朝にすがすがしい空気の中で澄んだ鐘の音を聞くと穏やかに1日が始まる気がします。//母
- とても懐かしい感じがする、又物悲しい中にも平和で穏やかな感じがする鐘の音は大好きです。都会の中でも鐘の音が聞こえたらいいですね。
- なぜか鐘という「結婚式」というイメージがある。
- 「鐘の音」からは夕方の風景が浮かんでくるが実際にその景色の中での体験ではなくて、幼い頃の絵本の1ページであったり、童謡の中からの連想するものであるようです。しかし、鐘の音は大きな感動を呼び起こします。//父母



5. テレビ

- いつも除夜の鐘を聞こうとしているが、全く聞こえないのでTVで聞いている。TVではないきちんとした鐘の音を聞きたい。
- 鐘の音というとテレビ番組の「行く年来る年」を思い出してしまう。テレビがどっかりと家の中にすえられているからだろうか。//母

6. 反感?

- やかましい
- 鐘の音はうるさいからやめてほしい。
- 鐘の音は聞こえないので静かによい。

7. 思い出

- 九州の故郷では、除夜の鐘が鳴り始め紅白歌合戦が終わった頃、着物に着替えた父親（80才）が、終戦後無事戻ってきたから現在に至るまで一年も欠かさず初詣に行っている。//母
- 故郷で両親と過ごした大晦日。団らんを終えて、冷えた布団の中で聞いたどこからかの鐘の音。//母
- 高校のとき近くにお寺があつてお屋の15分ぐらい前になると鐘が鳴った。あの音が聞こえてくると授業どころではなくなり、お腹の虫を抑える方に気をとられていた。//母
- 子供の頃、眠いのを我慢して近くのお寺に除夜の鐘をつきに行ったことがあります。寒い中、列をなして順番がくるのをいまいかいまと楽しみに待ち、自分の番が来たら一回しかつかなかったのが心残りでした。でも良い思い出です。//母
- 私が子供の頃、田舎の村では新年の年男が鐘をつくきまりになっており、私も小学6年の時について、自分のついた鐘の音があまりにも大きく、びっくりしたのを今でも思い出されます。//父

- 小学生の頃、除夜の鐘の音を数えていつも途中までしか数えられなかったことを思い出す。//母

- 鐘の音を聞くと教会での式を思い出します。//母

- 昔の思い出。高校まで住んでいた庄内平野の一村、村と村、村と町の距離が3〜5km離れている田園の中の町で、あるお寺の鐘の音が毎日夕方5時に鳴っていました。空気、寒暖、天候などによって毎日音色が違って聞こえてきました。特に秋晴れの空気の澄んだ日の鐘の音色が好きです。//父

- 鐘の音で印象に残っているものは、火の見櫓で打ち鳴らされる半鐘の音です。恐ろしい思いをした記憶があります。//母

- 昔、通学するとき聞こえる場所によって、今日は早いか遅いかがわかった。

- 昔は除夜の鐘がなる頃は雪がしんと降り、長靴をはいて雪を踏み締めながら親と一緒に初詣に行った覚えがある。とてもなつかしい。//母

- 練馬区に転居する前は品川区上大崎に住んでいました。近くにお寺が沢山あったので、毎年除夜の鐘を聞いて新年を迎えたものです。12時には品川沖の船が一斉に汽笛を鳴らしました。ディズニーランドの花火も海を渡って聞こえてきたものでした。新年に替えるところの様な音は良い思い出です。//母

- 音といえませんが騒音を思いがちですが以前港の近くに住んでいた時、除夜の鐘の代わりに港の船が一斉に汽笛を鳴らします。最初のボウーという音を聞くと窓辺に走り寄って港に響きわたる汽笛の音や新年になったばかりの空気を部屋の中に取り入れようと窓を開け放したものです。//母

8. 生徒の鐘体験

- 除夜の鐘を家族でつきに行った。
- 除夜の鐘をつきにいったことがある。店が沢山出て友人にも会えて面白かった。
- 除夜の鐘をつきに行ったら酒をもらった。
- 鐘の音は全然聞こえません。私は生まれて1回も鐘の音を聞いたことがないと思います。
- 全然聞いたことがないので特に思うことはない。

9. 聞こえない・・・

- もっと近くに鐘のある寺を作って欲しい。
- 全然聞こえないからもっと大きな音でならして欲しい。
- 遠くの人に鐘の音を聞かせるには鐘の音を大きくすればいいと思う。
- ぜんぜん聞こえないからスピーカーをつけてもらいたい。
- いろいろな生活雑音が増えていって、鐘のすんだ音はそれらの音に消されてしまっているのと、心にもそれを聞き入ろうとする余裕がなくなっている。//父

10. 親と子

- 自分は知らなかったが親はずっと聞こえていたらしい。
- 除夜の鐘をお父さんと外で聞いた。
- 除夜の鐘をつきにいったことがあった。家族全員で出掛け一人一人鐘を撞かせてくれた。とても嬉しかった。//父・兄
- 朝、早くに仕事をしているので朝7時になると聞こえてきます。それから子供を起こします。//母
- 子供達が小さい頃、除夜の鐘を聞きながら熱を出した子供の看病をしていました。//父

11. 環境

- 鐘の音が聞こえるときは家の回りがとても静かな時なのでホッとします。//母
- 閑越（筆者補注：高速道路のこと）が近いのでよく聞こえない。
- 子供達がまだ小さいときに鐘が鳴るとやっと寝た子が目を覚ますのではないかと心配しました。家があまりにも鐘に近すぎるのも問題です。//母親
- 住まいが教会の隣なので長年鐘の音を聞いていますが、自分自身の体調やゆとりで音が快く聞こえる時とうるさく聞こえる時があり、不思議な気がします。//母
- 懐かしいですね！ そうゆう環境に成るといいですね。//父
- 最近では夕焼けチャイムが鐘の音の代わりになっている様な気がします。本当の鐘の音が会園になったら素敵ですね。//母
- 朝に夕にどこからともなく鐘の音が風に乗って聞こえてくるような街には是非住みたいと思います。また自分の街がそのようになったらいいなと思います。//母
- 鐘の音が聞こえない、今日この頃さみしく思い、又子供達がそんな鐘の音を聞きながら大きく空、清浄な空気などの落ち着いた豊かな環境がよく似合います。鐘の音が響きにふさわしい、自然の縁を多く残した街づくりを望みます。//母

585件)。親の世代には、鐘の音に寄せて語りたい記憶や体験が数多くあるようだ(261件)。語られている内容は、自分が体験した過去の事実の説明だけではなく、自分の中に内在化した過去の風景にまで及んでいる。語り手自身のライフヒストリーの一部と言うべきものがある。鐘の音を語るということが語り手にとっては自己確認を促す役割も果たしたようである。

現在地での過去の思い出を語る例は少なく、かつて住んでいた故郷など離れた土地での思い出が多い。その方が思い出を美化しやすいためであろうと推察する。

残念ながら、このように内在化した思い出は中学生達から多くは聞くことができない(中学生の意見862件中思い出は56件)。しかし、自分の家族が鐘の音に寄せてこのような思い出を持っていたことを知る機会にはなつたと考える。

4. 1 2 鐘を撞いた体験(表-2-8)

「除夜の鐘を撞きにいったことがある」との回答が多く寄せられた(276件)。印象に残る体験であることがわかる。この体験は鐘に好意的な印象を持続させる要因になっていると思われる。

その一方で、中学生では「鐘の音を(一度も)聞いたことがない」と答える生徒も多い(中学生で72件、家族では10件)。

4. 1 3 聞こえない場合の対処行動 中学生と親達の違い(表-2-9)

鐘の音を聞くことのできない時に何を考えるかという点で中学生と親達の間で相違が見られる。中学生たちからは、「もっと大きな音で」あるいは「スピーカーから、鳴らして欲しい」という意見が出される。聞こえなくなっている原因を除去しようとする態度より、聞こえない音源の音量を増幅しようとする態度である。親の世代からは、このような意見は出てこない。むしろ聞こえなくなってしまった理由の方に関心が示された。

この相違を次のように考える。親の世代には、鐘の音の聴取を妨害する都市の喧噪が未だ少なかった時代の実態の記憶がある。今、鐘の音を聞きにくくさせている都市の喧噪は所与の条件ではなく、変え得るものと認識できる。これに対して中学生の方は、自らの記憶の中では都市の喧噪は既に所与の条件であるかの如く存在しており、都市の喧噪のより低いレベルの環境を実態としてイメージできない。イメージできない環境は獲得の対象になりにくい。他方、鐘の音は価値のある音の文化らしいということは中学生にもインプットされる結果、彼らの選択は喧噪に打ち勝つ鐘の音が出現すればよい、との志向が働く。

4. 1 4 世代をつなぐ鐘の音(表-2-10)

鐘の音を聞く態度が中学生と親の世代とでは相当に違うことが明らかになった。鐘の音への関心は、鐘の音と重なる記憶や体験が支えている。鐘の音が伴っているイメージも文化として伝承されなければ途絶えてしまう。感想の文章の中、鐘を介して垣間見る親子の姿に、学校教育の場ではまず困難な体験をとおしての文化の伝承が家庭の場において可能であるとの期待が見いだせる。家庭の教育力の相対的低下が言われる中でこのことは注目しておきたい。

4. 1 5 イメージが環境をつくる(表-2-11)

被調査者が鐘の音を聞こうとする態度をとった時に、いろいろな環境の姿に気づいたことが読み取れる。鐘の音一つも、その時の状況に応じて快とも不快ともなり一様でない多義的な現れ方をしている。

どのような環境であって欲しいか、自らの言葉で語られる環境、自分の感性が望む求める環境が示された。市民一人ひとりの、獲得すべき環境イメージが内発的に吐露された。

村上はその著書で「眼は、それが探し求めているもの以外は見ることができない。捜し求めているものは、もともと心のなかにあったものでしかない」という言葉を引いている⁶⁾。心の中のイメージが環境観となって現実に適用されるのは聴覚でも同じ筈である。

5. まとめ

中学生とその家族を対象とした鐘の音の調査から次の知見を得ることができた。

5. 1 物理的音環境と鐘の音の聴取

物理的音環境表現である音源を中心とした鐘の音のコンター図を、聴取の音環境表現として得ることはできなかった。また、寺院の近傍において聞こえないとの反応が散見され

た。これらのことから、鐘の音の認識を、音圧レベルの高低で一義的に説明するのは適当でないことが確認できた。

鐘の音を聞きにくくさせている要因として暗騒音の影響が認められる。このことを自動車音を阻害要因として確認した。

5. 2 鐘の音認識の要件

梵鐘を鳴らす寺院の周知を示す認識域があり、この認識域の大小は寺院の地域に対する親近性に関係していると考えられる。

物理的には存在しない音でも、経験や知識によって作られた「環境イメージ」が現実的に優先して認識を形成する可能性を確認した。

以上のように、鐘の音が認識されるためには、物理的に識別できること以上に、聞く者との関係性がより重要な要件と云える。

5. 3 環境イメージが環境を意味づける⁷⁾⁸⁾⁹⁾

鐘の音が象徴するイメージは文化的裏付けを持って定着している¹⁰⁾。そのイメージと照合して現実の鐘の音は意味づけられ、理解されている。メディアもこの文化を補強し更新している。また聞き手の個人は鐘を撞くあるいは鐘を聞くという体験をとおして文化的意味づけを再確認し、その文化を継承している。

5. 4 環境イメージの環境形成力

鐘の音が個人のライフヒストリーの中に織り込まれた「音の風景」となっている多くの例を見た。鐘の音を聞いた環境が内在化し、獲得すべき環境イメージを育てている例を見た。

鐘の音は、集団の文化と個人の体験との双方によって意味づけられてきた。しかし若い世代では鐘の音体験の機会が減少し、ライフヒストリーの中に位置を占めなくなりつつある時代の変化も把握された。環境イメージを喪失することはそれに対応する環境を喪失することにつながる。「鐘の音の聞こえる環境」の保全のためには、鐘の音が織り込まれた生き方や生活スタイルにインセンティブを与えることが有益となるであろう。

市民一人ひとりが環境形成の担い手であるという認識が重要さを増している。市民は自らの環境イメージを実現しようと環境に対して行動するのであるから¹¹⁾、豊かな環境イメージが形成・定着するよう行政の場から努力したい。

本調査は平成5年度の環境庁委託事業の一環として実施された。

参考文献

- 1) 山下充康, 音戯話, 1989, 7, コロナ社
- 2) プログラム開発: 練馬区環境保全課大槻守
- 3) M・シェーファー, 世界の調律, 1986, 12, 平凡社
- 4) 鳥越けい子, 神田のサント・スケーフ (中間報告), 1987, 10, 神田サント・スケーフ研究会
田中直子, サント・スケーフの思想をめぐって, 1990, 12, 音響学会音楽音響研究会資料
田中直子, 都市の響き、空間に住まう音, 1991, 12, ISLA No. 1, 文化科学高等研究室
- 5) 坪井良平, 梵鐘と古文化, 1993, 10, ビジネス教育出版社
- 6) 村上陽一郎: 近代科学を超えて, 1986, 11, 講談社
- 7) 沢田允茂, 認識の風景, 1975, 12, 岩波書店
- 8) Y・トウアン, トボフィリア, 1992, 1, せりか書房
- 9) A・ヘルク, 風土としての地球, 1994, 3, 筑摩書房
- 10) 例えば、平家物語の冒頭の一節「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」など。
- 11) 大西行雄他, 環境イメージ論, 1992, 3, 弘文社